慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	トッテと大人 : 幼児絵本の翻訳に関する比較教育学的実験
Sub Title	Hur upplever japanska föräldrar skillnader mellan Totte och Tommy-chan?
Author	石崎, 秀和(Ishizaki, Hidekazu)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1983
Jtitle	哲學 No.77 (1983. 12) ,p.185- 224
JaLC DOI	
Abstract	In the former paper I discussed the translation problems of children's picture books from a viewpoint of comparative education. The target books I chose for this purpose were "Totte-series" originally written by Gunilla Wolde in Sweden. These books have not only gained world wide popularity amoung younger children, but are also valued very highy both at home and abroad because of their uniqueness and distinguished educational ideas. The main assumption I based myself upon for the discussion comprises that translating activity or adaptation of imported children's books concerns the prevailing standard of good books and good education seriously in the sense that publishers in each coutry are always eager to perceive, for the sake of their successful enterprise, their own parent-purchasers' real demands on "the good for the children." Careful analysis of adaptively translated versions could therefore uncover these real motives and intention over children, which must have much in common with those informal determinants govering inwardly the actual dynamics of an educational system besides formal regulations. Under these premises Japanese version of Totte-series was critically examined in comparison both with the Swedish original and the English version, with reference to the different educational atmospphere each of these 3 countries has. The former study I mentiond briefly above has left some important questions untouched though it might attain its aims to som successful degree. Most of these questions are clearly related to the proposed premises themselves. What I endeavour in this paper is to give empirical evidence and support to these premises through a series of experiments.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000077-0185

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

トッテと大人

——幼児絵本の翻訳に関する比較教育学的実験——

石　崎　秀　和*

Hur upplever japanska föräldrar skillnader mellan Totte och Tommy-chan?

Hedekazu Ishizaki

In the former paper I discussed the translation problems of children's picture books from a viewpoint of comparative education.

The target books I chose for this purpose were "Totte-series" originally written by Gunilla Wolde in Sweden.

These books have not only gained world wide popularity amoung younger children, but are also valued very highy both at home and abroad because of their uniqueness and distinguished educational ideas.

The main assumption I based myself upon for the discussion comprises that translating activity or adaptation of imported children's books concerns the prevailing standard of good books and good education seriously in the sense that publishers in each coutry are always eager to perceive, for the sake of their successful enterprise, their own parent-purchasers' real demands on "the good for the children."

Careful analysis of adaptively translated versions could therefore uncover these real motives and intention over children, which must have much in common with those informal determinants govering inwardly the actual dynamics of an educational system besides formal regulations.

Under these premises Japanese version of Totte-series was critically examined in comparison both with the Swedish original and the English version, with reference to the different educational atmospphere each of these 3 countries has.

The former study I mentiond briefly above has left some important questions untouched though it might attain its aims to som successful degree.

Most of these questions are clearly related to the proposed premises themselves. What I endeavour in this paper is to give empirical evidence and support to these premises through a series of experiments.

* 慶應義塾大学文学部助教授（教育学）.
東村山市の上田滋氏を始め，研究に御協力いただいた方々に感謝致します.

問題の所在

私は先の論文[1]の中で，「教育界における私達自身の文化維持活動が，幼児向け絵本“トッテ”[2]の変貌をもたらした」，或いは，「トッテ絵本の翻訳に伴う変貌は，私達日本人の教育観を露わにした」，ということを論証したつもりである．しかし，そこで用いた論法が，あくまでも演繹的な推論であった為，もう半分の課題が，私の手許に残ることになった．つまり，「私達は，日本人の親として大人として，子どもの健全な成長を願うが由に，独特な形での，外国絵本の改作を望んでいる」，ということが論理的に推察された以上，今度は，本当にそうなのかということを，帰納的ないし経験的に，解明する必要が生じたのである．

また先の推論の中で，私は原作の“トッテ”のことを，「世界中の幼児に，重要な教育的インパクトを与え得る絵本」という風に，大変に高く評価した．しかし本来，トッテ絵本は，日本の子どもや大人に対して，何か訴えるものを持っているのだろうか．更に，その何かは，果して，私が原作（オリジナル・テキスト）から抽出した特徴に，対応するものであろうか．こうした疑問に対しても，それなりの経験的な解答が与えられないと，先の推論は，根拠の無いものになってしまう恐れがある．

こういう訳で，私は，どんなアプローチをすれば，上記のことがらに関する具体的資料が得られるものなのだろうか，ということを，色々と模索してみた．本論文の中で紹介するのは，そうした模索を通じて得られた「大人とトッテ絵本」についての，一応の結論である．

トミーちゃんの評判

1976年に，偕成社から邦訳出版された，日本版トッテつまり『トミーちゃん』シリーズ[3]は，その後の5～6年間に，どの位の数の，日本人の子どもによって，読まれたのだろうか．恐らくそれは，せいぜい一握りの子ど

も達に過ぎないであろう．というのは，最初の印刷分，つまり2,500部ほどが送り出された後は，増刷が全く行なわれていないばかりか，初刷分に関しても，書店からの返品が，大変に多かったからである[4]．こうした児童図書の成功，失敗の見通しは，普通1ヶ月から3ヶ月位で立つ，と言われている[5]．従って，実はもうその時点で，出版社側は，『トミーちゃん』が失敗作であるという判断を，下していたのである．偕成社編集部の判断では，17cm×17cm という小型本であった為に，店頭で目立たなかったのであろうとか，内容が地味すぎたからだろう，ということであった．しかし，本当にそうなのであろうか．

同じ体裁の翻訳絵本としては，例えば，福音館書店から出ている，ディック・ブルーナの『子どもがはじめてであう絵本』のシリーズがある．だがこちらの方は，10年間で既に20刷を越えている．それに，日本，米国，中欧などの絵本作家の描く絵が，濃い目の色調を持っているのに比べて，グニラ・ヴルデの描く“トッテ”の絵は，北欧画家にだけ共通した，透明感の高いものである[6]．従ってそれだけでも，“トッテ”は，充分目新しく写るように思われる．いずれにせよ，事実として明らかなことは，“トッテ”のオリジナル版や翻訳版が，各国で増刷を続けて，既に世界のミリオン・セラーになっている[7]のに対して，唯一，日本では，全く死んだ本になってしまっている，ということである．

本国スウェーデンにおける“トッテ”の人気は，近年増々高く，1980年以降は，ろうあ児童からの要望によって，テキストの部分に，小さく描いたトッテ坊やの顔や手で，手話を入れる[8]，というような配慮まで為されているのである．この事実などは，トッテ絵本にとって，テキストつまり文章部分の意味が如何に大きいか，ということの傍証になるのかもしれない．また，“トッテ”と，その姉妹作の“エンマ”[9]を創ったグニラ・ヴルデは，スウェーデン全国の図書館統計に依ると，現在，アストリッド・リンドグレーンやエルザ・ベスコウに次いで，あらゆるジャンルの作家の内

でも，スウェーデン国内で，最も人気のある作家の一人になっているのである.[10]

更に翻訳されて米国に紹介された“トッテ”も，米国における児童向優良図書の一つとして，確かな地位を与えられている.[11] しかし皮肉なことに，『トミーちゃん』の方は，偕成社が独自に選定した優良児童図書の中にさえ，見出すことができない．つまり“トッテ”は，偕成社自身からも，いわば無視されてしまった状態なのである.[12]

こんな風に，『トミーちゃん』が，日本の親や子ども達から余り歓迎されなかった，という事実によって，元々の“トッテ”が持っていた教育的インパクトというのも，大した代物ではなかったのではないか，と早急な結論を出す人がいるかもしれない．しかし私は，文化調整つまりテキストの改作によって切り落された部分にこそ，“トッテ”の真骨頂が潜んでいた，と考えている．更に，その“トッテ”の特徴が，現代日本の教育風土とは，どこか馴じまないものであるだけに，もし『トミーちゃん』が“トッテ”の素顔のままで現われていれば，読者達から，当然，反発も含めて，何か新鮮な反応をぶつけられていたはずだ，と想像しているのである．従って，『トミーちゃん』が不人気だった原因は，むしろ文化調整が余りにうまく行き過ぎて，極く平凡な幼児向絵本の一つになってしまったせいだ，と思っているのである．

そうしてみると，『トミーちゃん』は，確かに小型本で目立たないし，題材が日常生活に集中している為に，地味でもある．その上，描かれている子どもや風俗は，どこか外国風で親しみが持てない．なぜならば，読者である３～５才の幼児に，異国趣味が芽ばえているとは，とても思えないからである．つまり，どこの国の子どもにも訴えかけるような特徴が削除されてしまった結果，今度はスウェーデンのローカル色ばかりが，絵を通して目立って来るのである．確かにヴルデの描画力は，かつて新人画家として賞を受けただけに，非常に秀れており，次世代の絵本作家への影響を

問題にすることさえできる．しかし如何にヴルデの腕が秀れていても，オリジナル・テキスト抜きで，日本の一般読者を感動させる迄には，到らなかったようである．

実験Ⅰ：トッテとトミーちゃんの対決

こういう現実の下で，先ず私が調査を試みたのは，「翻訳編集者達が“トッテ”の邦訳に際して，日本人の親達が望んでいる在方として採用したという翻訳の姿勢が，果して，本当に親達の全面的承認を得るものだったのだろうか」，ということを探ることである．

所で現代社会では，家族の構成や機能が，大きく変化してきている．従って，幼児を抱えながら仕事を続ける母親というのも，決してめずらしくない．この為，今や，幼児と関わる時間が一番長いのは母親である，ということを無条件に断定することは，難しくなってきている．[13] こういう訳で，幼児と最も長い時間生活を共にし，その関わりの中で，絵本を取扱うことにも馴れている人，ということになると，むしろ仕事として，保育に従事している人達，ということになってしまう．更に保育時間が長いことと，扱う子どもが，0才児から5才児まで，巾を持っていることを考慮に入れると，保育園（所）の保母さんというのが，現代では，「幼児をかかえた母親の目を持つ人」として，最も適任者であるように思われる．そこで1980年の秋に，東京都東村山市にある，6つの市立保育所の内，3所を訪問して，次の様な実験的調査を行なったのである．[14]

〔実験目的〕 トッテ絵本を，偕成社版テキストと，私製の直訳テキスト[15]の両方を使って，順次紹介し，その後で，「幼児に読んでやる場合には，どちらのテキストの方が良い，或いは好ましいと思うか」，という判断を聞き出すこと．

〔被験者〕 有資格の保母28名で，すべて女性．年令は20代前半から30代前半に集中しており，平均年令（中位数）は27才．その内，自分自身が子

どもを持つ母親であるもの12名，未婚ないし，子どもを持っていないもの16名である．

〔実験材料〕 テキスト部分を抹消したトミーちゃん絵本を，スライドに取り直したもの２作品分[16]．偕成社版テキストと，私製直訳テキストとを，第三者に朗読してもらい，カセット・テープに録音したもの，各２作品分．取上げた作品を偕成社版題名で示すと，初期の作品から『くまくんどこ』，後期の作品から『マリーちゃんとぼく』，である．この他に実験実施の際には，スライド・プロジェクター，スライド・スクリーン，カセット・プレーヤーを，各１台持参した．

〔実験手続き〕 教示の後，スライドとカセットテープを使って，同一絵本を２種類のテキストで，続けて読み聞かせ，「貴方自身は，どちらのテキストの方が，幼児に読んでやる場合に，良い或いは好ましいと思うか」という判断を，求める形を取った．実験場所は各保育所の会議室で，７～11人単位の集団実験方式を用いた．教示内容は，「これから，絵本に書かれている文章，つまりテキストのあり方について，皆様の御意見を御聞きしたいと思います．題材としては，グニラ・ヴルデという原作者が創りまして，偕成社から出版されております，トミーちゃん絵本[17]を，取上げようと思います．手順と致しましては，スライドを使って絵本を御見せしながら，２種類のテキストを，次々に読んでまいりますので，後で，２つのテキストの内，どちらの方が良い，或いは好ましいと思われるか，を御答え下さい．つまり皆様には，全く同じ絵本を，２種類のテキストを比較する為に，２度見ていただくことになります．そして自分が，３～５才位の子どもに読んでやるとしたら，どちらの方を取りたいか，ということを，できれば理由もそえて，判断していただきたい，と思います．なお途中で，解答用紙の余白などに，メモを取られても結構です．何か質問がございますか．よろしければ始めさせていただきます。」

また実験手続きについての教示は，２番目の作品に関する実験の前に

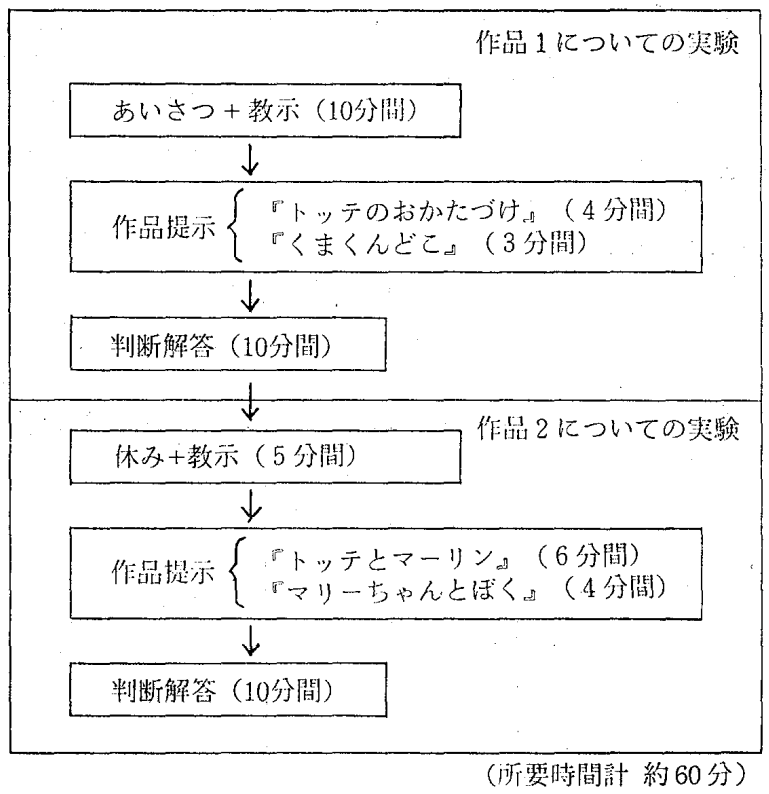


図1　実験Ⅰの組立て

も，繰返して行った．実験の流れを図にすると，上の通りである．

2種類の作品の提示順序は，『トッテのおかたづけ（くまくんどこ）』の方が，『トッテとマーリン（マリーちゃんとぼく）』よりも初期の作品であり，内容的にも，明らかに年少向けなので，先行させることにした．しかし同一作品にそえた2種類のテキストの間では，各保育所毎に提示順序を変え，全体として，順序効果が相殺低減するように工夫した．

〔実験結果〕 各作品毎に，2種類のテキストが，どの位好まれるのかを，表にしてみる．

なお実験は，幼児達が午睡している時間帯の，1時間を活用したが，それでも時として，中座を余儀なくされる保母さんがいた為，作品1と作品2とでは，被験者数が同一ではない．

先ず表1について，保育所間で，テキストの好みに関するちらばりがあ

表1　作品1について：各テキストを好ましいと判断した人の数

保育所 / テキスト	No. 3	No. 4	No. 5	計	(%) 人数比率
邦訳版『くまくんどこ』	4	7	4	15	54
直訳版『トッテのおかたづけ』	6	4	3	13	46
計	10	11	7	28	100

表2　作品2について：各テキストを好ましいと判断した人の数

保育所 / テキスト	No. 3	No. 4	No. 5	計	(%) 人数比率
邦訳版『マリーちゃんとぼく』	5	4	2	11	42
直訳版『トッテとマーリン』	4	7	4	15	58
計	9	11	6	26	100

るどうかを調べると，$\chi^2=1.23$, $df=2$, $P_{\chi 2}>0.5$ で，有意差はない．そこで保母さん全員を，一まとめにして，特定のテキストに対する好みがあるかどうかを調べると，$\chi^2=0.14$, $df=1$, $P_{\chi 2}>0.5$ でそうしたテキストの好みは検出されないのである[18]．

次に表2について，同じように，保育所間で，テキストの好みに関するちらばりがあるかどうかを調べると，$\chi^2=1.00$, $df=2$, $P_{\chi 2}>0.5$ で，有意差はない．そこで保母さん全員について，特定のテキストに対する好みがあるかどうかを調べると，$\chi^2=0.62$, $df=1$, $P_{\chi 2}>0.25$ で，やはり，そうしたテキストの好みは見出されないのである．

さらに，作品1と作品2を通じて，同一の被験者に，一貫したテキストの好みがあるかどうかを，ϕ 係数を使って調べてみると，$\phi=-0.43$（イエーツの補正後），$\chi^2=n\phi^2=4.6$, $df=1$, $P_{\chi 2}<0.05$ で，案に相違して有意な負の相関が検出されたのである．なお表3は，ϕ 係数算出の為の相関表である．

さて以上の結果を要約すると，1）邦訳テキストと直訳テキストの，い

表3　両作品について各テキストを好んだ人の数
（テキストの好みについての相関表）

作品1＼作品2	直訳テキスト	邦訳テキスト	計
邦訳テキスト	11	3	14
直訳テキスト	3	8	11
計	14	11	25

ずれを良しとするかに関しては，2作品のどちらについても，保母さんの間で，意見が相半ばしたということ．2）また，片方の作品について邦訳テキストなら邦訳テキストを選んだ人が，もう一方の作品についても，一貫して邦訳テキストを採り続けるかと言うと，そうした傾向は認められず，むしろ作品によって，テキストの好みを動かす人の方が多かったのである．3）更に実験終了後の質問で確認できたこととして，以前にトミーちゃん絵本を目にした人が，保母さんの間に一人もいなかったこと．4）それに，各作品に付けられた2種類のテキストが，相互に全く別物であることに，全員が同意した，という事実を付け加えておく．

〔検討〕ここで，ひとまず実験Ⅰの結果が，先の論文の結論と，どのように関わるのかを，問題にしてみよう．まず第1に，偕成社版の邦訳は，日本人の親達が望んでいるような方向を目ざして行なわれたはずであるが，少くとも，保育関係者を対象に実施した．この予備的実験が明らかにする所に依れば，そうした方向づけは，どうも日本人の親達から，絶対的な承認を得るものとは，言い難いようである．また私製版の直訳テキストは，オリジナルテキストの内容を直に伝えることだけを狙った，いわば精度の低いものである．しかし，その拙い文章と比べられた時に，翻訳としては大変仕上りの良い邦訳テキストの方が，これだけ苦戦したのである．従って，邦訳版とオリジナル版の間の落差というのは，文章技巧というようなものとは次元の違う，何か児童観や教育観に関わる大きなものである

らしい，という私の推論は，曲りなりにも，経験的な裏付を得た，と言えそうである．

しかし同一人物（被験者）が，一貫して，邦訳テキスト，或いは直訳テキストを推しはしなかった，という事実は，どのように理解したら良いのであろうか．先に私は，オリジナルテキストが，全作品を通じて，共通した特徴を持っていると論じた．従って，もし被験者が，この共通特徴の有無を手がかりにして，テキストの好嫌判断を下しているのだとすれば，こうした実験結果は起り得ないことになる．つまり一貫して，その共通特徴を保有する直訳テキストを採るか，或いは，共通特徴とは別の色合いを持つ邦訳テキストの方を採るか，のいずれかである．

所が現に，こうした実験結果が得られたというのは，私がオリジナルテキストから抽出したと主張している共通特徴が，元々あいまいで，客観性を欠くものであったせいかもしれない．或いは，たまたま実験に用いた2つの作品が，相互の共通特徴を上回るほどの，個性を持ったものであった為，かもしれない．だが，この疑問に答える為には，「なぜ，一方のテキストを好ましく思ったか」について，被験者が提出した理由や根拠を，精細に分析しなければならない．しかし残念なことに，この実験Ｉでは，判断解答時間が短かかったことや，理由の記述を強要しなかった為に，この点では，分析に堪えるだけの，充分な資料を得ることができなかった．

そこで，「被験者はテキストの選択に際して，どのような理由や根拠を掲げるのか」ということに重点を移して，次の実験Ⅱを計画したのである．

実験Ⅱ：なぜ片方のテキストを選ぶのか？

〔実験目的〕 今回は，邦訳テキストと直訳テキストの，いずれが好まれるかを調査するよりも，むしろ好嫌判断の根拠として，どんな理由があげられるかを調べることに，主目的を置いて，実験を行った．

〔被験者〕 被験者の標本を，ある程度大きく取る必要を感じたので，1981年夏期スクーリング中，私の講義を履習した慶応義塾大学通信教育生220名に，被験者として御協力いただいた．その内，男性は81名，女性は139名である．求めに応じて年令を明記したもの210名について平均値（算術平均）を求めると，男性が26.5才（N＝76，SD＝7.4），女性が28.3才（N＝134，SD＝7.2）となり，実験Ｉの被験者の年令と，ほぼ同様である．但し年令範囲が18才から58才にわたり，特に18才から40才までは，あまねく年令分布の認められる点が，実験Ｉの場合と異っている．

また男性の78％は，会社員・公務員・自営業者であるのに対して，女性の場合は，62％がそうした仕事に就いており，27％がいわゆる専業主婦であると推定される．[19] 更に通教生は，北海道から九州に到るまで，広く全国から集まって来ている為，特定の地域性を持っていないし，学歴に関しても様々である．

こういう訳で，この標本から推定できる母集団は，正しくは通信教育生の総体であるが，様々な社会グループからの参加が目立つ，最近の通教生の現状を踏まえた上で，敢えて大まかな目でみれば，「日本人の大人」に近いのかもしれない．

〔実験材料〕 実験Ｉで用いた，『くまくんどこ』と，『マリーちゃんとぼく』のスライド各１組．それに，上記２作品に対する，邦訳テキストと直訳テキストとを，それぞれ，オーバーヘッドプロジェクター用原紙に書いたもの，各１組．

〔実験手続き〕 基本的には実験Ｉと同様の手順を踏んだが，変更した点は，「読み聞かせ」方式をやめて，スライドプロジェクターで絵を提示する傍，テキストの方も，オーバーヘッドプロジェクターで同時提示する．というやり方を採用したことである．つまりテキストを耳で聞く方式から，目で見る方式に切換えたのである．その理由は，大人の場合，子どもに読んでやるという立場上，テキストを目で追う方が自然かもしれないと

考えたことと，テキストに関してメモが取りやすいように，ということを配慮したからである．

教示は実験Ⅰとほぼ同一であるが，テキストの選択判断に際して，その理由や根拠を必ず書きそえるようにということを，入念に強調した点が，従来と異っている．

また判断理由を充分に記述してもらえるように，実験所要時間を図2のように，1.5倍近く増加させた．実験場所は，AV 装置のある大教室を使い，全被験者を同時に対象にする．集団実験方式を採用した．実験の組立ては，図2の通りである．

〔実験結果：その1〕 まず実験Ⅰの場合と同様に，各作品毎に，それぞれのテキストを好ましいと判断した人の数を，分布表にしてみる．

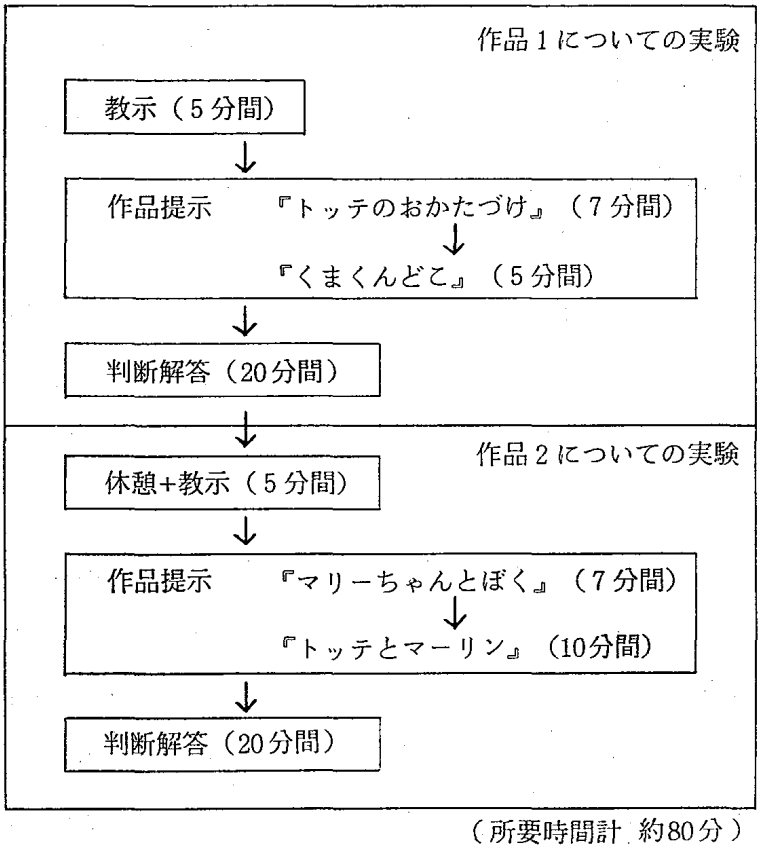


図2 実験Ⅱの組立て

表4　各テキストを好ましいと判断した人の数

作品／テキスト	作品1		作品2	
	人数	(%) 人数比率	人数	(%) 人数比率
邦訳テキスト	122	60	132	62
直訳テキスト	81	40	82	38
計	203	100	214	100

表4M　各テキストを好ましいと判断した男性の数

作品／テキスト	作品1		作品2	
	人数	(%) 人数比率	人数	(%) 人数比率
邦訳テキスト	42	58	43	54
直訳テキスト	30	42	37	46
計	72	100	80	100

表4W　各テキストを好ましいと判断した女性の数

作品／テキスト	作品1		作品2	
	人数	(%) 人数比率	人数	(%) 人数比率
邦訳テキスト	80	61	89	66
直訳テキスト	51	39	45	34
計	131	100	134	100

被験者の数が，作品1と作品2で違うのは，前半あるいは後半のみ受験した被験者が，いた為である．

今回の被験者は，男性と女性とを含んでいるので，表4を更に性別に分たものが，表4Mと表4Wである．

表4では，2つの作品のいずれについても，邦訳テキストの方が好まれている．(作品1については，$\chi^2=8.28$，$df=1$，$P_{\chi 2}<0.05$，作品2につい

ては $\chi^2=11.7$, $df=1$, $P_{\chi 2}<0.05$ で，共に有意差がある.）

しかし，表4Mと表4Wのように，男女別に比べてみると，男性では，2つの作品共に，テキストの好みが，邦訳版と直訳版の間で拮抗していることが判る.（作品1については，$\chi^2=1.0$, $df=1$, $P_{\chi 2}>0.25$, 作品2についは，$\chi^2=0.45$, $df=1$, $P_{\chi 2}>0.25$ で，共に有意差はない.）

従って，邦訳テキストへのはっきりした嗜好を示したのは，主として女性である，と言うことができよう.（表4Wの数値を検定すると，作品1については，$\chi^2=6.42$, $df=1$, $P_{\chi 2}<0.025$, 作品2については，$\chi^2=14.4$, $df=1$, $P_{\chi 2}<0.005$ で，共に有意差がある.）

次の表5は，テキストの好みが，個人の中で安定しているかどうかを調べる為の，相関表である．実験Ⅰの場合ほどではないにせよ，やはりここでも，テキストの好みが，それほど一貫している訳ではない，という事実を読みとることができよう.（$\phi=0.01$, $\chi^2=n\phi^2=0.02$, $df=1$, $P_{\chi 2}>0.5$ で有意な相関はない.）

そこで，いよいよ判断理由の分析の方へ，目を向けてみることにする.

〔実験結果：その2〕 被験者が解答紙に叙述した判断理由は，平均すると，各作品に対して1人200字前後になった．そこで，この叙述文の集計を，次のような手順で行った.

（1） 各作品毎に，叙述文が，邦訳テキストを好ましいとする立場で書かれているのか，それとも直訳テキストを好ましいとして書かれているの

表5　両作品については各テキストを好んだ人の数
（テキストの好みについての相関表）

作品1＼作品2	直訳テキスト	邦訳テキスト	計
邦訳テキスト	40	80	120
直訳テキスト	27	51	78
計	67	131	198

かを調べて，それによって，解答紙を2つのグループに区分した．

（2） 次に，各グループ毎に，判断理由を評定集計する為のカテゴリーを求めた．その為に，先ず各被験者の叙述文の中に，幾つかの異なる理由や根拠が含まれていないかどうかを調べ，もし含まれていれば，それを一つ一つ，別個のものとして，総て書き出す，という作業を行った．そして，各被験者から提出された様々な理由を，グループ内の全被験者に関して寄せ集め，良く似たもの同志をまとめて，1つのカテゴリーとした．なお，叙述文から理由や根拠を抽出する際には，投影法的な読み込みを極力避け．できるだけ書かれてある通りの（顕在する）文章を抜き出す，という手順に終始した．更に，各グループ内で，各種の理由をまとめる際にも，できるだけ，表現が同一であるということを，優先させた．その上で，内容的に同一と認められるものを加えて，1つの判断カテゴリーとして固めたのである．

こうして引出された「判断理由のカテゴリー」は，作品1に関して，邦訳テキストを好んだグループから21個，直訳テキストを好んだグループから19個，また作品2に関しては，邦訳テキストを好んだグループから24個，直訳テキストを好んだグループから15個という結果になった．

（3） 最後に，各グループ毎に用意された上記のカテゴリーを使って，各被験者の判断理由叙述文を，改めて評定し直した．

（4） 所で，各種のカテゴリーは，大きく，2つのタイプに分けることができる．一方は，自分が選択したテキストは，こういう点で好ましい，という言い方をするポジティブなタイプ，そして他方は，自分が選択しなかった方のテキストは，こういう点で好ましくない，という言い方をするネガティヴなタイプである．つまり二者択一に伴う，相対的な判断理由であるから，上記のような，2タイプのカテゴリーが生じた訳である．

そこで今後，カテゴリー内容を記述する際には，ポジティヴなものは，そのまま記し，ネガティヴなものは，「《むこうは》……」という形で，表

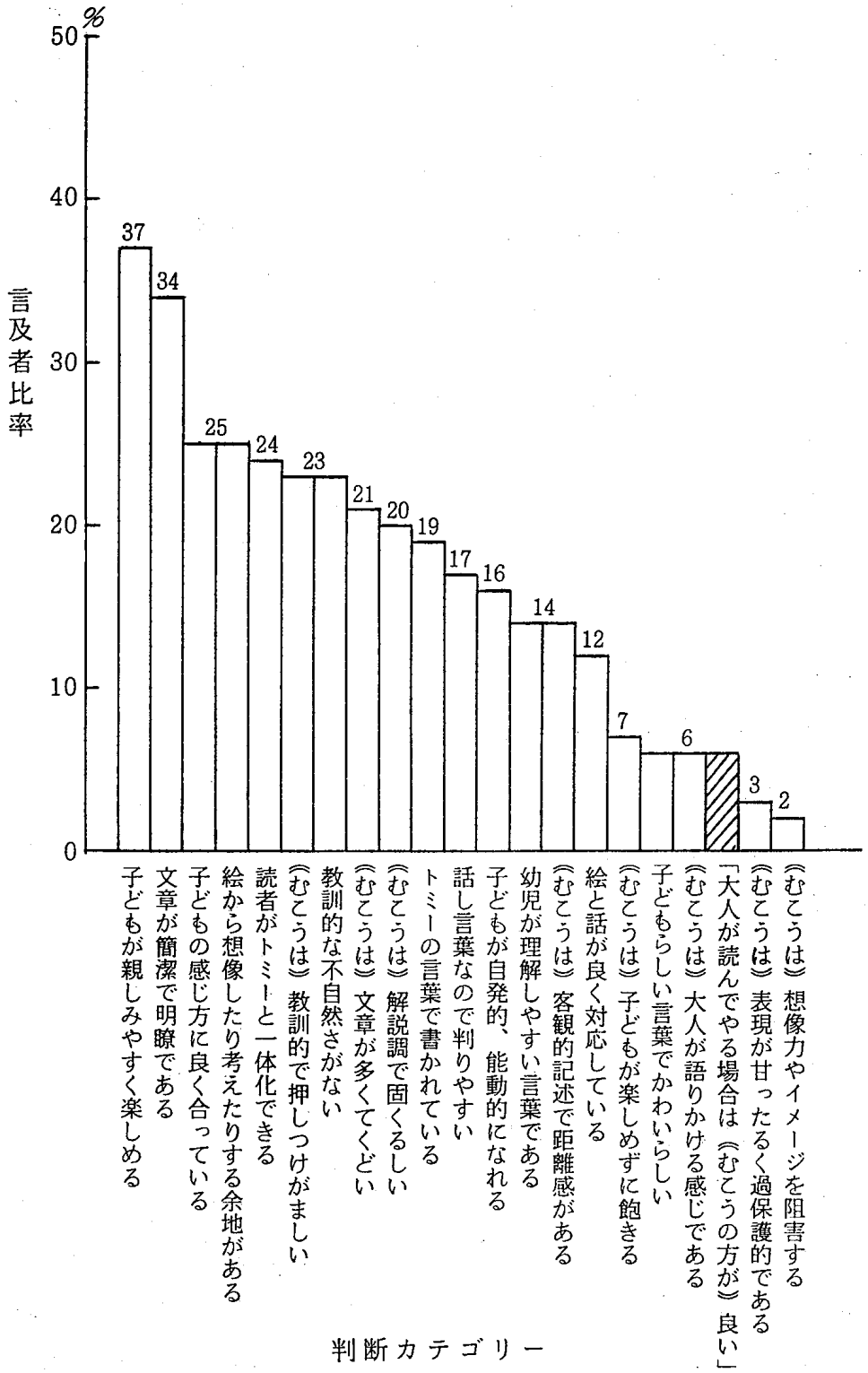


図3　『くまくんどこ』を好む人達が言及した
判断カテゴリーとその言及者比率（N＝122）

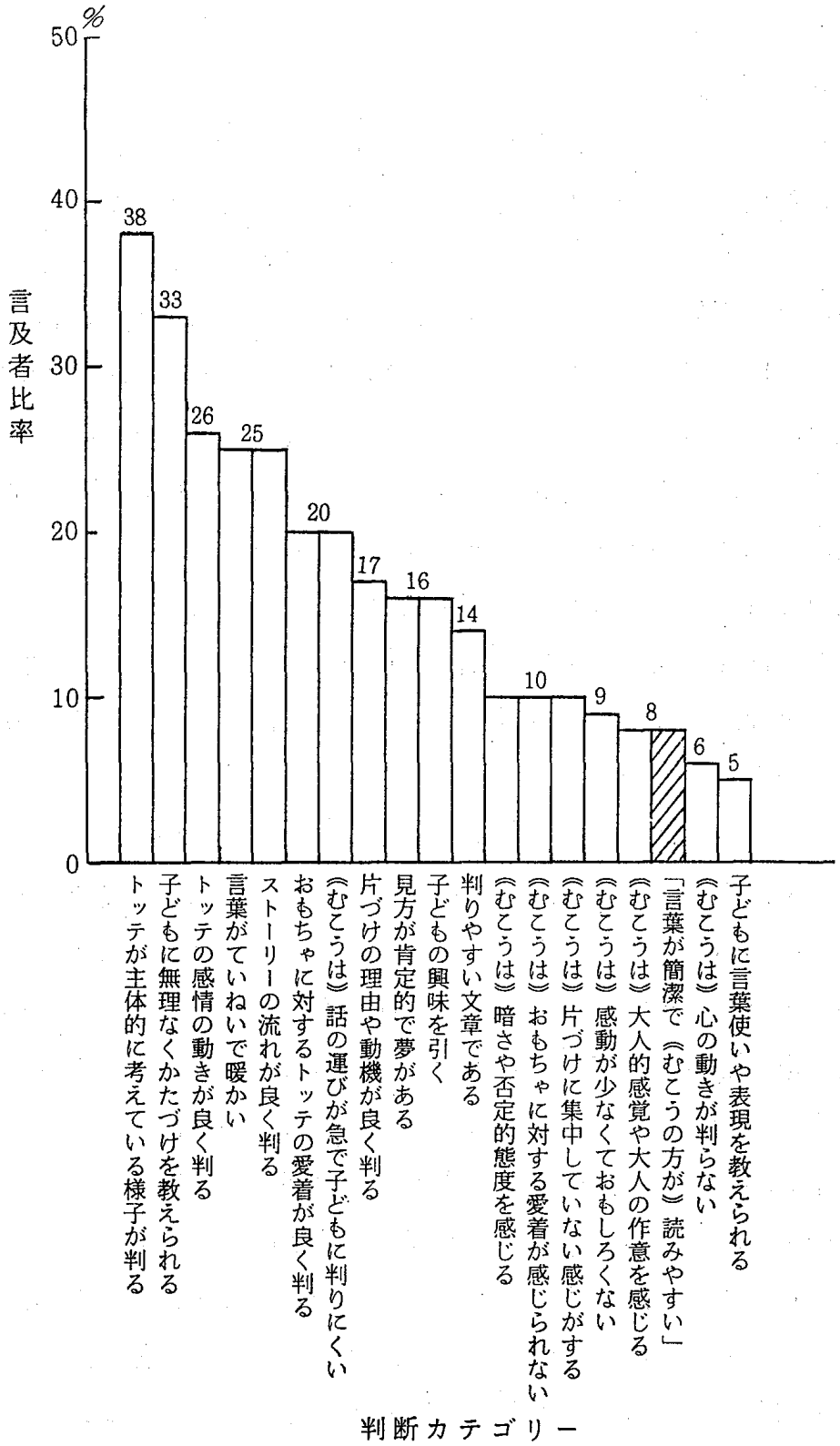


図4　『トッテのおかたづけ』を好む人達が言及した
判断カテゴリーとその言及者比率（N＝81）

現することに決める．

〔検討１：作品１について〕

邦訳テキスト『くまくんどこ』を好ましいと判断した被験者グループでは，その理由として，１人平均3.5カテゴリーに言及していた．そこで，総てのカテゴリーを，言及者数の多かった順に並べ，言及者比率（各カテゴリーの言及者数÷グループの被験者総数）をとってみると，図３のようになる．(但し，被験者総数は122名，言及カテゴリー延総数は428である)．

また直訳テキスト『トッテのおかたづけ』を好ましいと判断した被験者グループの方は，１人平均3.1カテゴリーに言及していた．そこで，これも同様に，図４に各カテゴリーと，言及者比率をとってみた．(但し，被験者総数は81名，言及カテゴリー延総数は254である．)

こうして図３と図４の横軸には，それぞれのグループ毎に，判断カテゴリーの一般性，或いは「言及されやすさ」の程度を示す，順序尺度ができ上った訳である．

次に，この一般性尺度の上で，各カテゴリーの独自性ないし重要性を描き出すことにする．そこで，図３や図４のように，同一被験者を複数のカテゴリーについて，だぶって数えるということをせずに，各人が言及した幾つかのカテゴリーの内で，最も一般性の高いカテゴリーを，その人の中心理由であると見なして，そのカテゴリーの所で，ただ１回だけ，数えることにする．そして，既に求められた一般性尺度の上に，先ず，各カテゴリーを中心理由として述べた被験者の数を目盛り，次にそれを，同じ一般性尺度の上で，言及者の累積比率曲線という形に，表現し直してみる．こうして得られたのが，図５と図６である．つまり各グループから出て来た沢山のカテゴリーを，最少限いくつ使えば，グループ全体の，大まかな判断傾向を知ることができるのかを，図の上で求めたのである．

この両図を見比べると，邦訳テキストを好ましいとした被験者グループと，直訳テキストを好ましいとした被験者グループの間で，形式上の類似

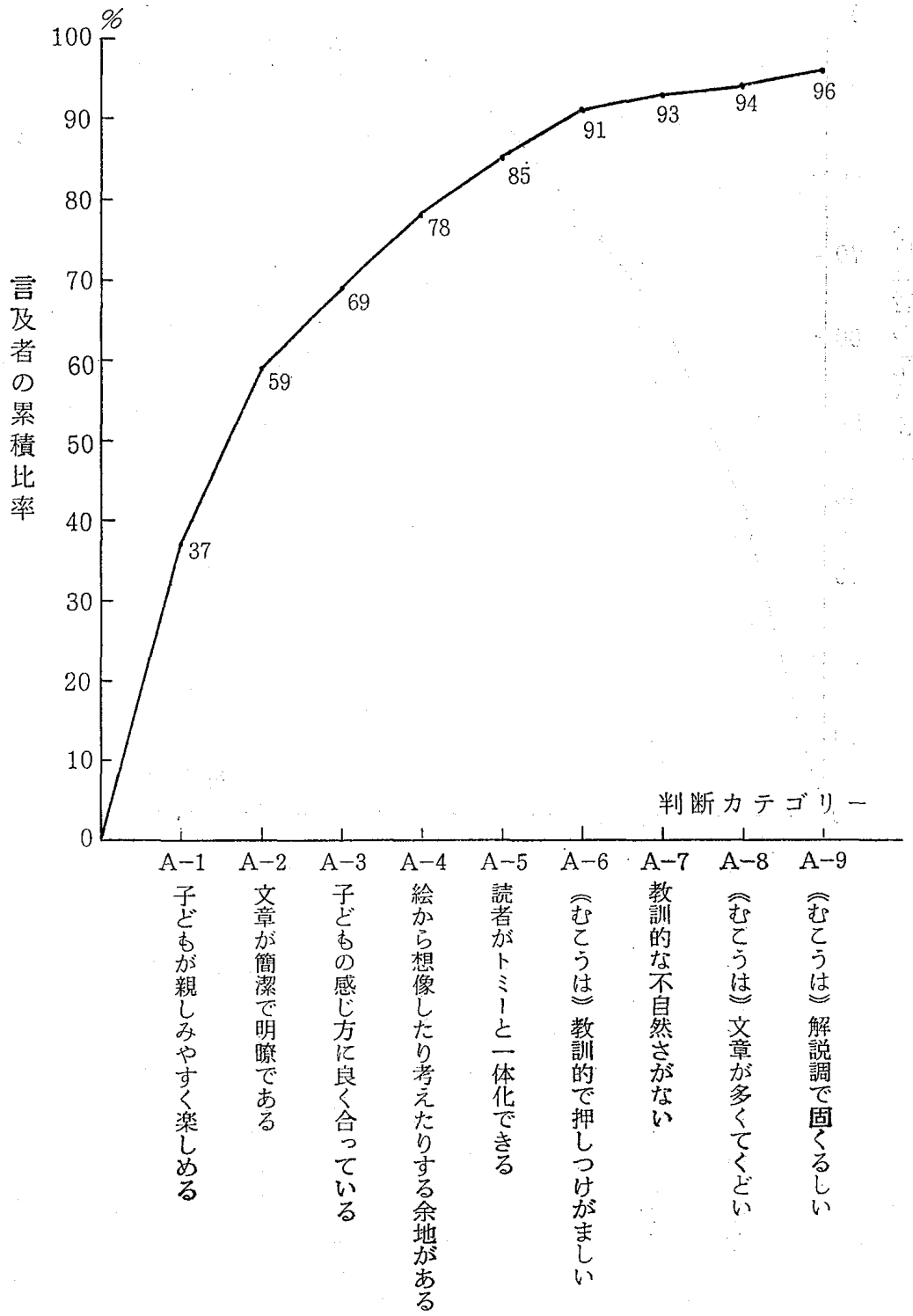


図5　累積比率曲線で見る各カテゴリーの重要性
『くまくんどこ』を好む人達について（N＝122）

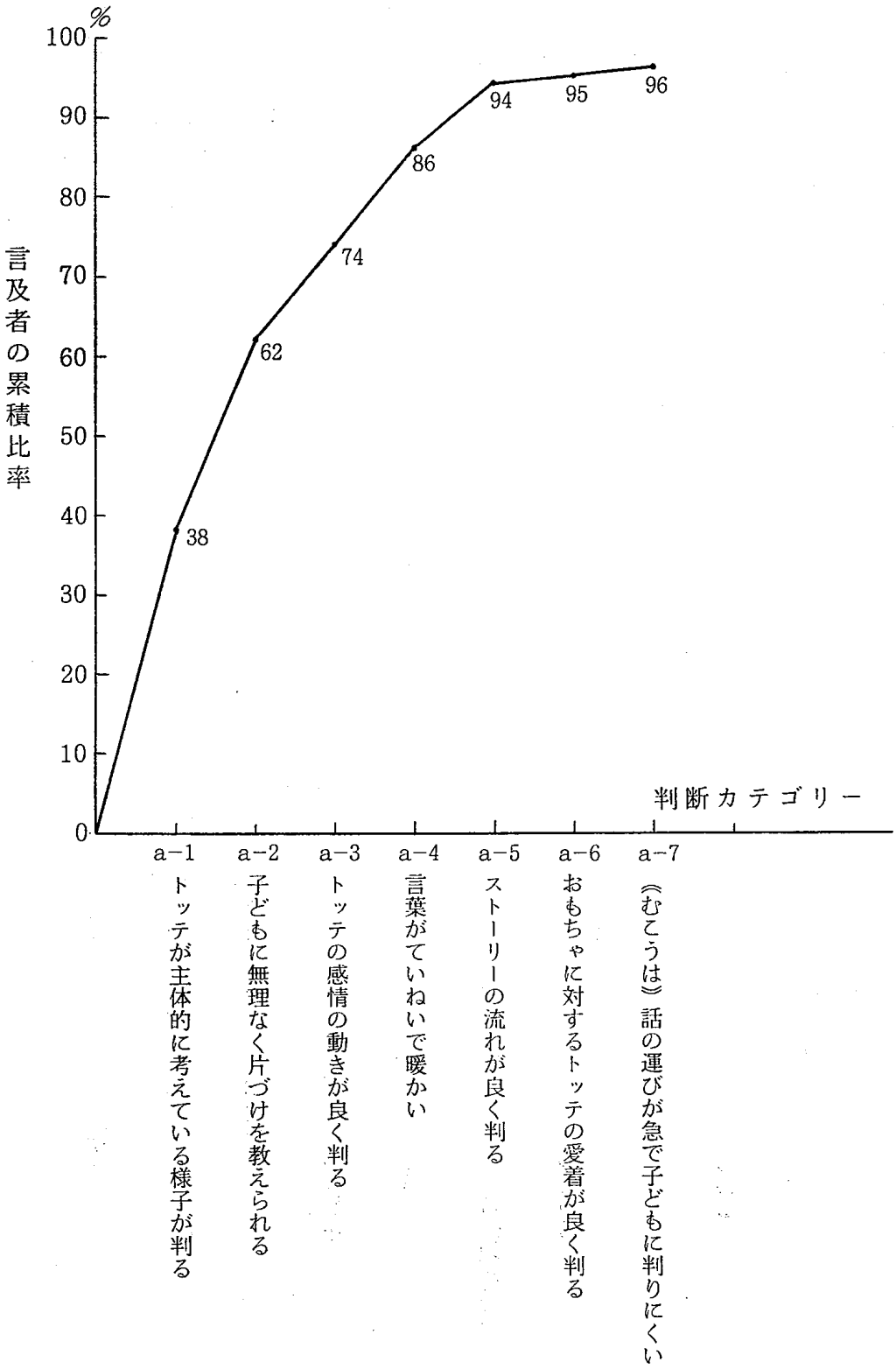


図6　累積比率曲線で見る各カテゴリーの重要性
『トッテのおかたづけ』を好む人達について（N＝81）

点を指摘することができる．つまり全体の60％位の被験者は，各グループにおいて最も一般性の高い２つのカテゴリーの内，少くとも一方には言及しており，更に全体の90％以上の人が，一般性尺度の上位に位置する５つか６つのカテゴリーのいずれかを判断理由としてあげているのである．こういう意味で，各グループの全般的な判断理由を説明する際に，最も重要なカテゴリーというのは，せいぜい７～９個であろうと，判定されるのである．

〔検討２：作品２について〕

邦訳テキスト『マリーちゃんとぼく』を好ましいと判断した被験者グループでは，１人平均3.4カテゴリー，直訳テキスト『トッテとマーリン』を好ましいとしたグループでは，１人平均2.4カテゴリーが，判断理由として，それぞれ言及されていた．そこで作品１の場合と同様に，言及者比率を元に，先ず判断カテゴリーの一般性を調べる．図７と図８とが，両グループに関する，その結果である．（但し，図７では被験者総数132名で，言及カテゴリー延総数は448．図８では，被験者総数82名で，言及カテゴリー延総数は198である．）

次に，やはり作品１の場合と同じやり方で，一般性の高いカテゴリーに対する，言及者の累積比率曲線を求める．図９と図10が，それぞれのグループに関する結果である．

今回の場合は，最も一般性の高いカテゴリーが，非常に大きな決定力を持っているという点が，両グループに共通した傾向である．またB-７のカテゴリーは，図７の言及者比率では14％に過ぎないが，図９の勾配から判断すれば，独自性の高い，より重要なカテゴリーと見なすべきであろう．

こうして，両グループの判断理由を全般的に説明する上で，最重要なカテゴリーの数は，この作品に関する限り，各グループで，８～10個位だろうと，見積ることができるのである．

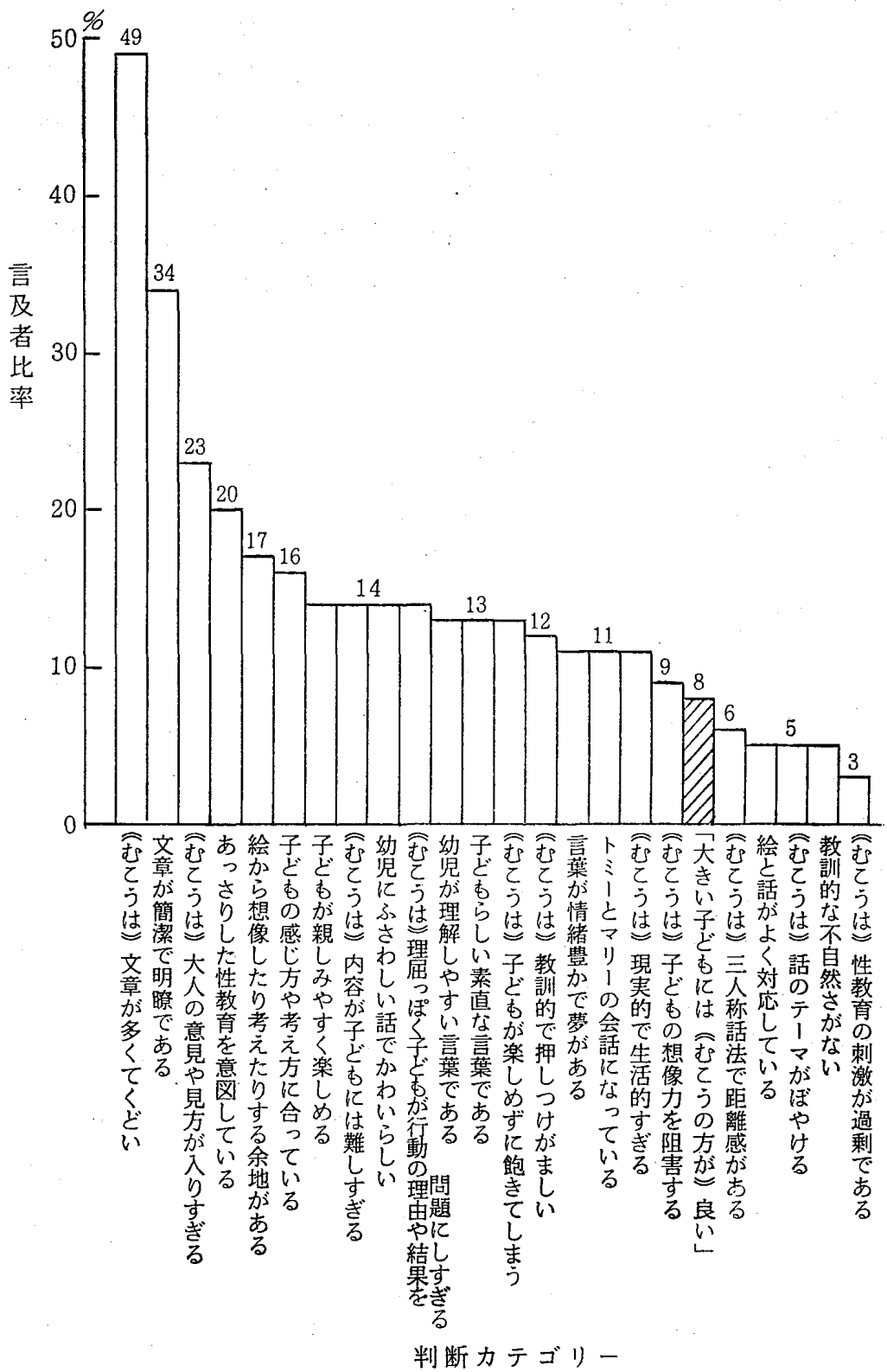


図7　『マリーちゃんとぼく』を好む人達が言及した
判断カテゴリーとその言及者比率（N＝132）

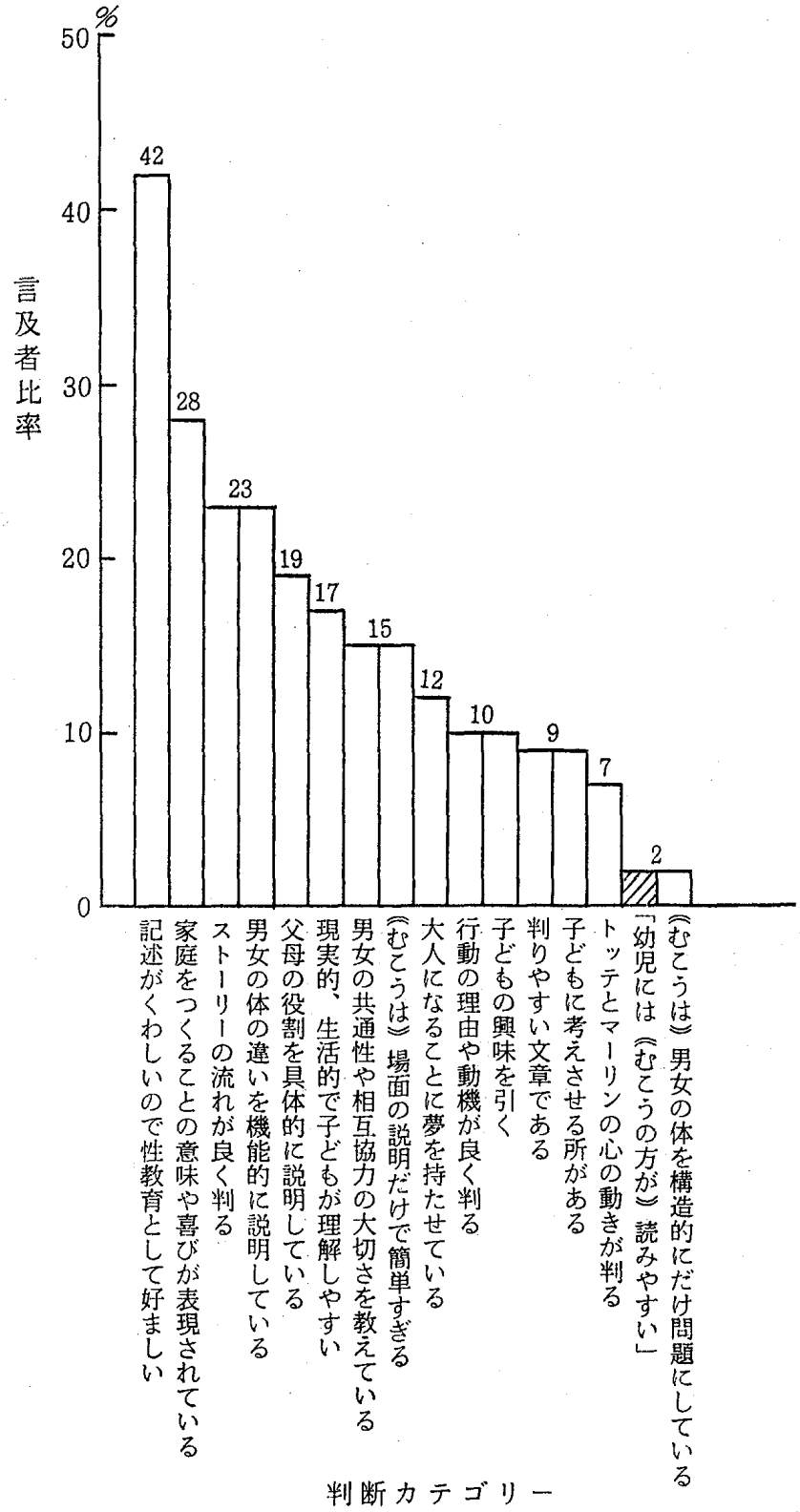


図8　『トッテとマーリン』を好む人達が言及した
利断カテゴリーとその言及者比率（N＝82）

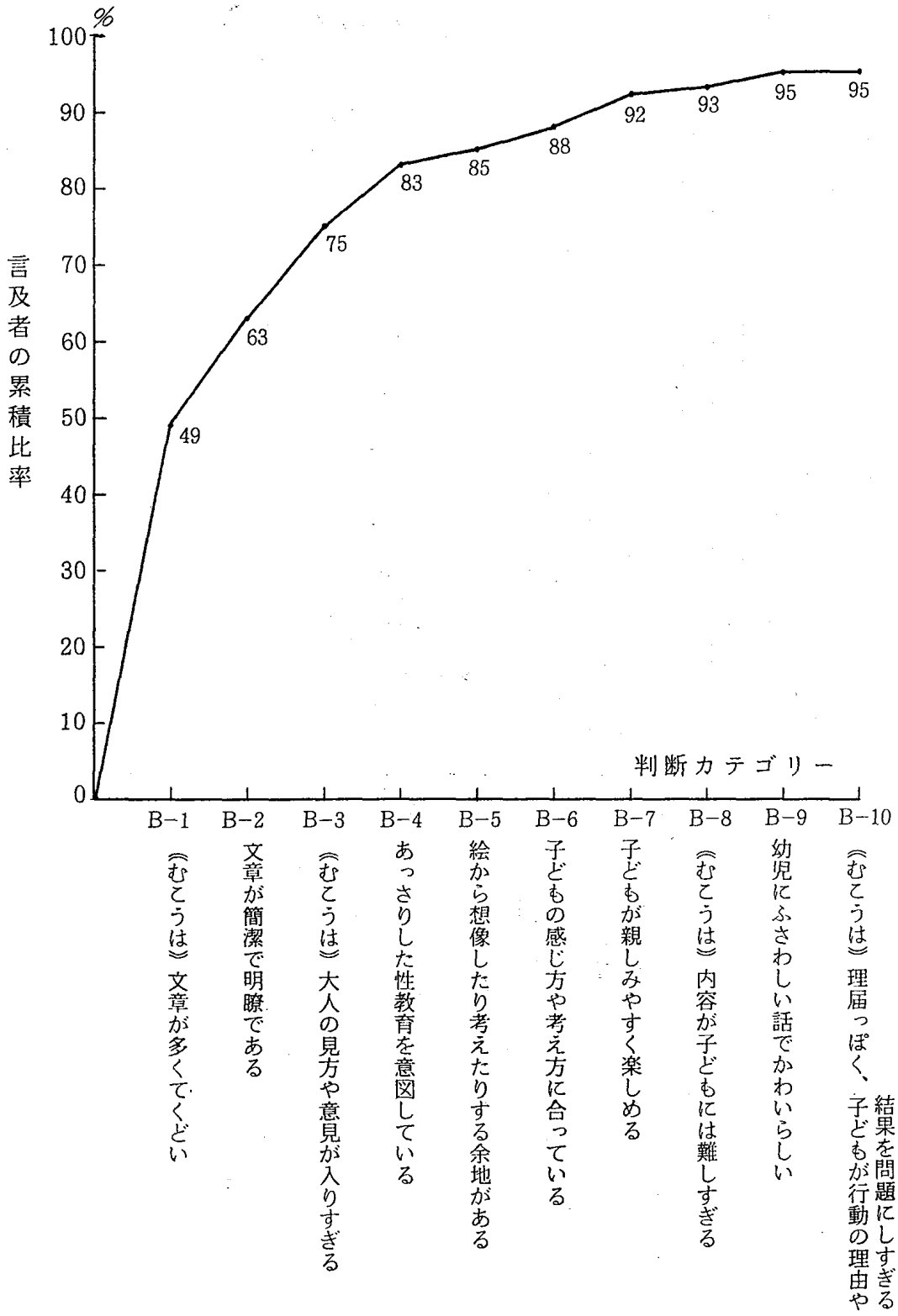


図9　累積比率曲線で見る各カテゴリーの重要性
『マリーちゃんとぼく』を好む人達について（N＝132）

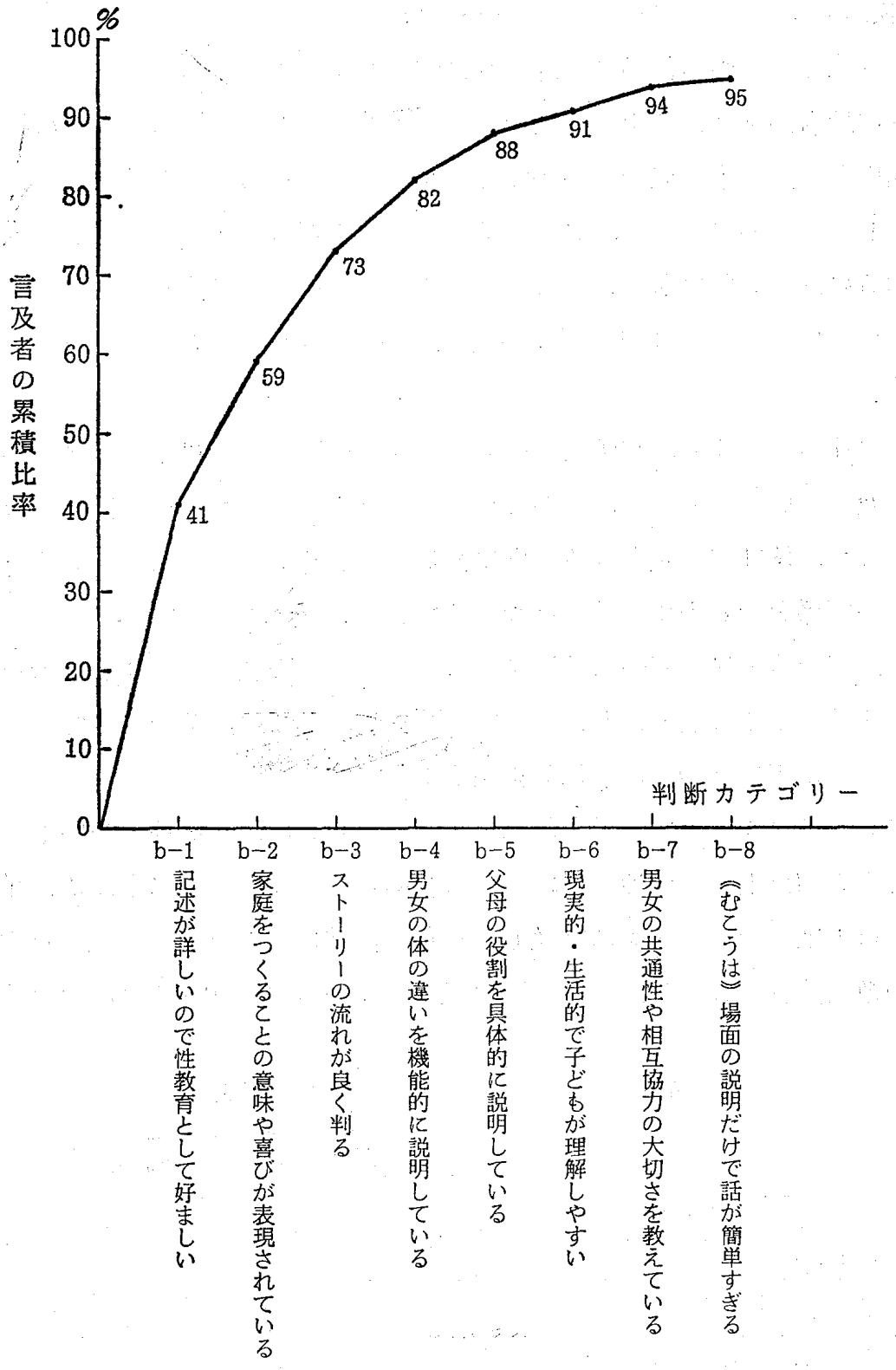


図10　累積比率曲線で見る各カテゴリーの重要性
『トッテとマーリン』を好む人達について（N＝82）

〔検討3：カテゴリーのクラスター分析〕

こうして．2つの作品のそれぞれに関して，邦訳テキストを好ましいとする被験者が挙げた理由と，直訳テキストを好ましいとする被験者の挙げた理由とが，一応，幾つかの判断カテゴリーという形で，明らかになった．しかしこのままでは，まだカテゴリーの数が多すぎて，全般的な傾向を知るのは容易ではない．そこで，各カテゴリーを更に大きなかたまり（クラスター）にまとめることができないかどうかを，調べてみることにした．

既に述べたように，被験者の殆どは，判断に際して，複数のカテゴリーに言及していた．従って，どのカテゴリーとどのカテゴリーが同一被験者によって，続けて言及される傾向にあるのかを算出できれば，各カテゴリー間の関係を知る上で，誠に好つごうである．そこで，「2つのカテゴリーが，同一判断者（被験者）によって言及される程度」という意味での，相関係数を求めることにした．なお相関係数としては，データの性質上，次のような表に基づく，ϕ係数を使うことにする．

但し，各グループで言及されたカテゴリーの数は，一般性の高いものだけでも5個以上，一般性の低いものも含めると，15個以上にもなる．従って，例えばカテゴリーxに言及しながら，同時にカテゴリーyに言及する人の数（f_{xy}）に比べて，xに言及しながら，y以外のいずれかのカテゴ

表6　カテゴリーxとカテゴリーyの相関表

$$\left(\phi_{xy}=\frac{f_{xy}\cdot f_{x'y'}-f_{xy'}\cdot f_{x'y}}{\sqrt{S_x\cdot S_{x'}\cdot S_y\cdot S_{y'}}}\right)$$

カテゴリーy ＼ カテゴリーx	言及者数	非言及者率	計
非言及者数	$f_{xy'}$	$f_{x'y'}$	$S_{y'}$
言及者数	f_{xy}	$f_{x'y}$	S_y
計	S_x	$S_{x'}$	N

リーに言及する人の数（$f_{xy'}$）の方は，確率的に随分と大きくなることが予想される．このことは f_{xy} と $f_{x'y}$ についても同様であるから，その結果として，ϕ 係数の値は，全般的にかなり低くならざるを得ない．そこで ϕ 係数の有意水準をゆるく取って，一応，危険率10％という所に置くことにする．また先に述べた目的により，$\phi_{xy}>0$ という範囲でのみ，カテゴリー間の関連をとり上げることにする．

所で ϕ_{xy} が有意な正相関を示した場合，カテゴリー x とカテゴリー y の関係は，どのように判断したら良いであろうか．可能性としては，x に言及した上で，性質の全く異なるカテゴリーとしての y に触れる，ということも，勿論考えられる．しかしその場合，確率的には，カテゴリー y でなくて，カテゴリーで z あっても，またカテゴリー w であっても，ちっとも構わないということになる．従って，被験者グループが全体として，全く性質の異なる特定の2つのカテゴリー x と y に，同時に言及するというような傾向を示すことは，余り期待できない．むしろカテゴリー x に触れることによって，似たようなカテゴリー y が連想されたり．もともと関連した内容を，カテゴリー x とカテゴリー y に分けて言及していた，という場合の方が，グループ全体の傾向としては，より強調されて出てくるもの，と思われるのである．つまり ϕ_{xy} が有意な値を取った場合には，カテゴリー x と y とが，何か密接な意味関連を持っていると見た方が，妥当ではないかと考えられるのである．

こうして求められたのが，図11～14図である．危険率を10％程度に見込んで，相関係数が0.15以上の関係は総て拾い出してある．また危険率を5％に上げても有意と認められるような，より確実な関係に対しては，カテゴリー間を極太線で結んで，区別することにした．更に，他のカテゴリーとの相関関係は無いものの（つまり，独立性が高く），図5～図10の分析によって，重要なカテゴリーと認められたものは，図中に然るべく配置してみた．（A-3，a-3，B-4，B-7，b-1，b-3の各カテゴリー．）

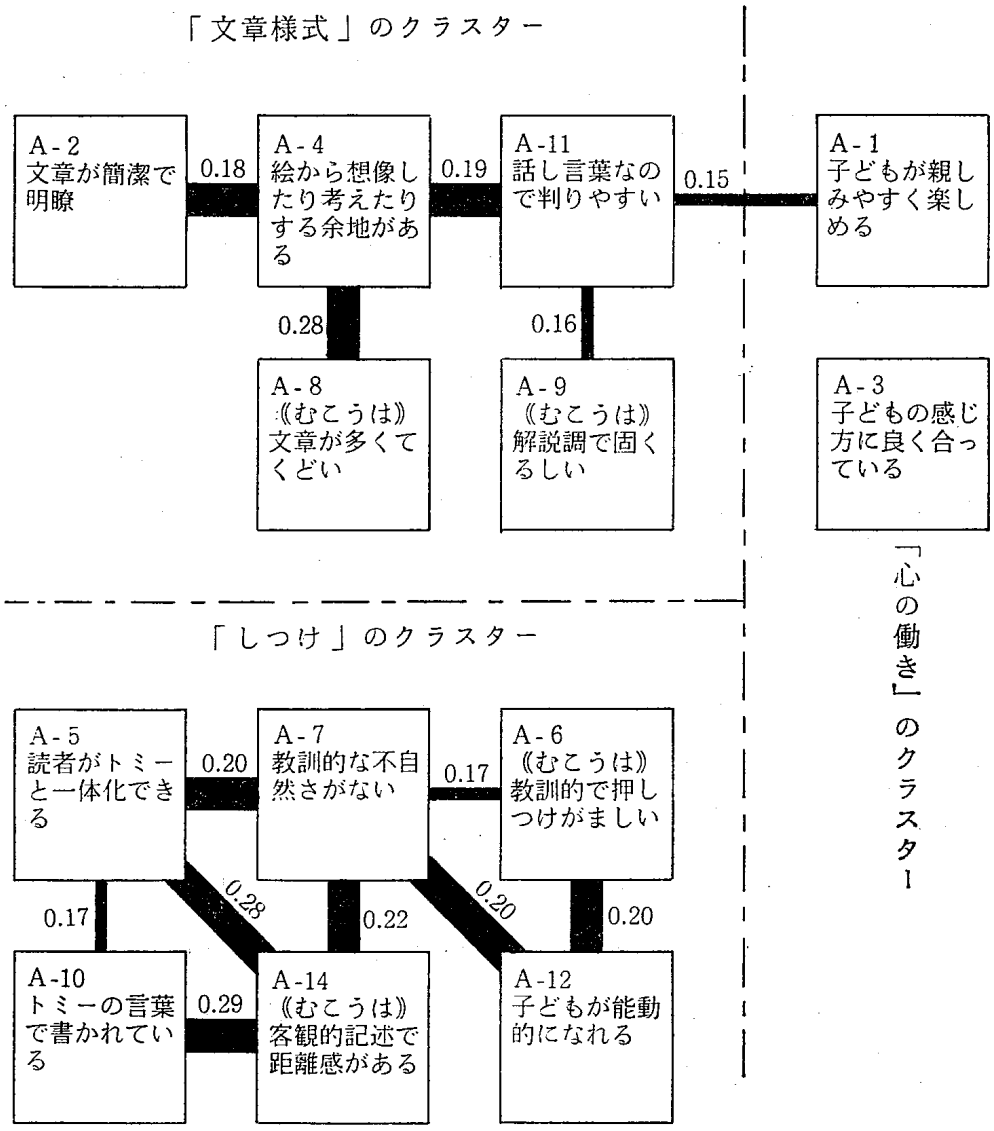


図11　『くまくんどこ』を好む判断に含まれるカテゴリーの相互関係

さて４つの図をつき合わせてみると，どの被験者グループの判断の中にも，大まかに，次の３種類のクラスターが，含まれているように見える．第１は，「文章の様式」に関するクラスター，第２が，「しつけや教育のあり方」に関するクラスター，そして第３が，「心の働き」に関するクラスターである．

そこで次に，図11と図13，図12と図14という風に，２組の対を作り，邦

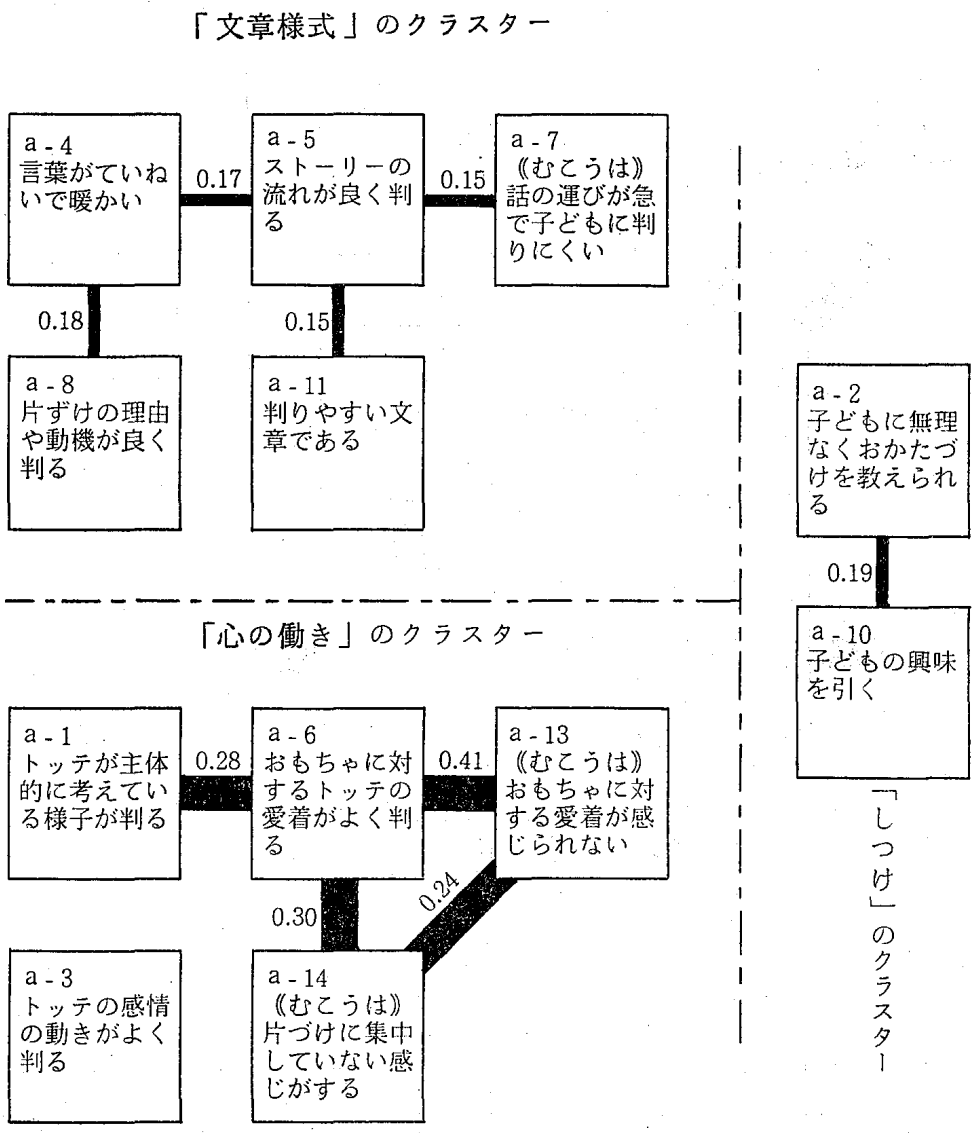
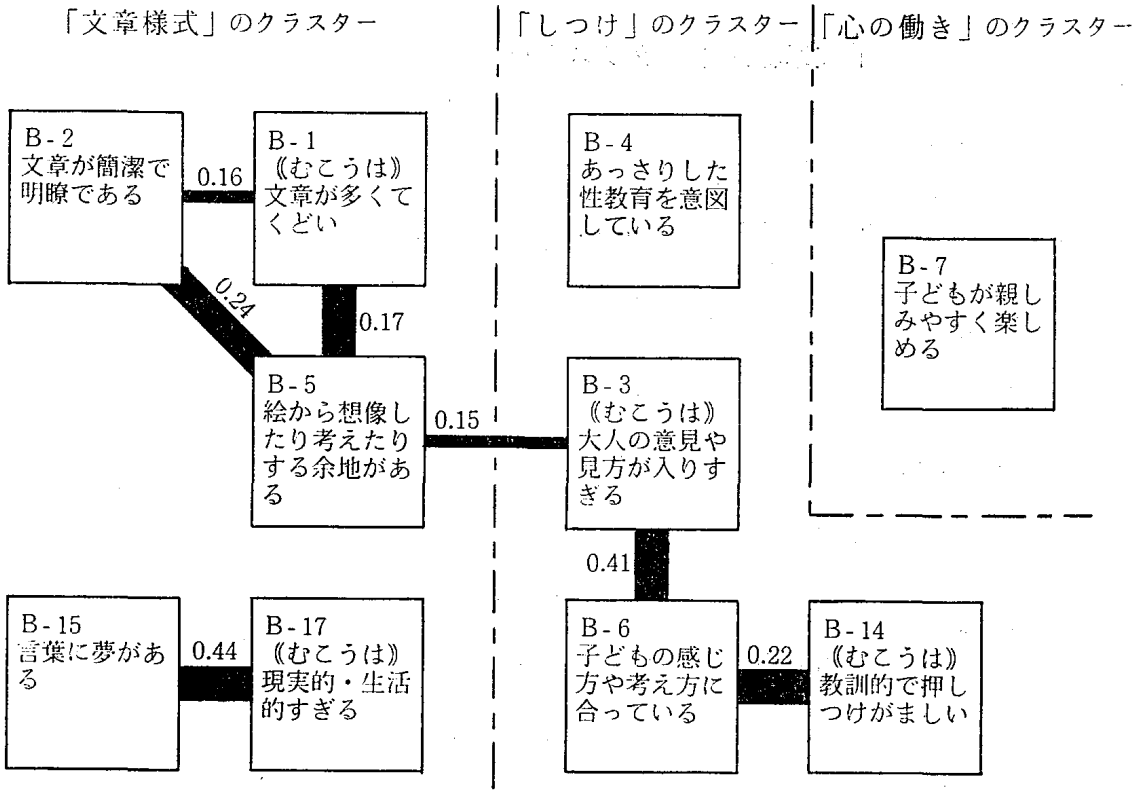


図12　『トッテのおかたづけ』を好む判断に含まれるカテゴリーの相互関係

訳テキストを好ましいとした判断理由と，直訳テキストを好ましいとした判断理由の中に，それぞれ一貫した特徴がないかどうかを，探ってみよう．

〔検討4：邦訳テキストを好ましいとした判断の特徴〕

図11に含まれる13個のカテゴリーと，図13に含まれる10個のカテゴリー



国13　『マリーちゃんとぼく』を好む判断に含まれるカテゴリーの相互関係

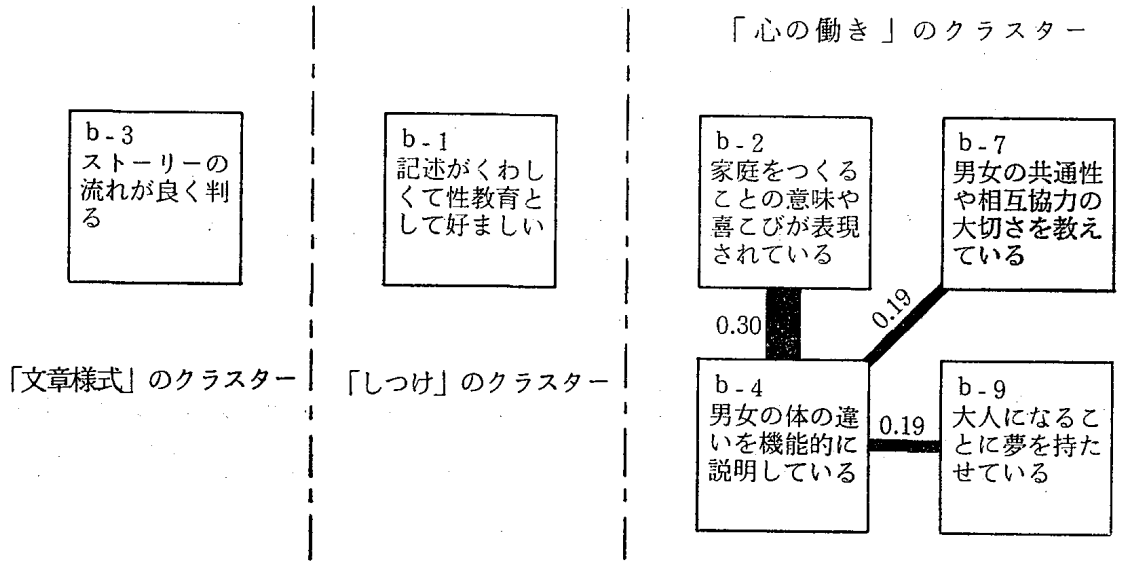


図14　『トッテとマーリン』を好む判断に含まれるカテゴリーの相互関係

を比べてみると，その内6個が，全く同一である．詳しく言うと，「文章様式」のクラスターから，「文章が簡潔で明瞭である」，「《むこうは》文章が多くてくどい」，「絵から想像したり考えたりする余地がある」の3つ，「しつけ」のクラスターから，「《むこうは》教訓的で押しつけがましい」，それに内容的には，「心の働き」クラスターに属していると思われるカテゴリーから，「子どもの感じ方や考え方に合っている」と，「子どもが親しみやすく楽しめる」の2つである．

次に図11と図13の全体を見渡しながら，既に明らかになっている各カテゴリーの重要性（一般性）を考慮したり，クラスターの枠内で，改めて各カテゴリーの意味内容を吟味する，という操作を加えてみる．すると，次の3点が，顕著な共通特徴として，浮かび上って来た．即ち，1)「文章様式」のクラスターが，判断に際して大きな比重を占めていること，2) 控え目な「しつけや教育のあり方」が，志向されていること，3)「子どもは子どもらしいもの」という認識が堅持されていること．の3つである．

〔検討5：直訳テキストを好ましいとした判断の特徴〕

図12と図14に共通のカテゴリーというのは，非常に少なくて，「文章様式」のクラスターに属する，「ストーリーの流れが良く判る」唯1つである．つまり，直訳テキストを好ましいとした判断理由の中には，2つの作品にそれぞれ固有なものが，かなりの割合で含まれている，ということになる．

しかし検討4の場合と同じように，クラスターの水準に照準を合わせながら，図12と図14を見渡してみると，1)「心の働き」クラスターが，判断に際して，常に重きを置かれている，2) しつけや教育に対して，肯定的な姿勢が取られている，それに，3) 物語の内容が充分に伝わることを重視している，という3点に，直訳テキストを好ましいとする判断の共通特徴が，明確に見出されるのである．

考察：トッテ・トミーちゃん・大人

先ず，２種類のテキストの内，いずれが，日本人の親や大人達に好まれるのか，と言えば，「それは，どちらとも言えない」というのが，実験Ⅰと実験Ⅱを統合した結論である．

確かに実験Ⅱの結果は，主婦を含む一般女性の間に，邦訳テキスト『トミーちゃん』を支持する声が根強いという事実を，示してくれた．しかし一般男性や保母さんの間では，直訳テキスト『トッテ』が，『トミーちゃん』並の支持を得ているのである．従って，被験者の採集方法如何で，もっと強力に『トミーちゃん』を支持する声を集めることも．可能かもしれないが，いずれにせよ，『トミーちゃん』への支持が絶対的である，とまで断言することは難しいのである．

次に，邦訳テキストと直訳テキストが，２種類の異なる作品に亘るような独自の特徴を．それぞれ持っているのかどうか，という問題があった．この疑問に対しては，「それぞれのテキストは，一貫した明確な特徴を持っている」という結論が，判断理由の分析を通して，明らかになったのである．

つまり，個々の被験者が提出した判断理由を総合し，それをカテゴリー水準とクラスター水準とで分析することによって，それぞれのテキストを好意的立場で見た場合の，両テキストの特徴というものが，浮き出して来たのである．このことは，必ずしも特定の人が，邦訳テキストなり，直訳テキストなりの，どちらか一方を常に推している訳ではない，という事情を考慮に入れた場合，なおさら興味深い．

とりわけ，被験者達が記述した邦訳テキストの特徴が，終始一貫していたのは，驚くばかりで，この傾向は，カテゴリー水準つまり具体的な水準で，既に顕著であった．一方，直訳テキストの方は，カテゴリー水準で見る限り，２つの作品に固有な性格の方が目立ってしまい，共通特徴の方

は，浮かび上って来なかった．しかし判定の目を，クラスター水準まで持上げてみると，『トッテ』の方も，かなり独自な特徴を．一貫して保持している，という事実が，明らかになったのである．

では『トミーちゃん』の特徴の方が，『トッテ』の特徴よりも明確であるという事実は，一体，何を意味するのであろうか．この問題に答える為には，作品1と作品2が，それぞれ，どういう内容を持っているのかを，前もって，簡単に説明しておく必要がある．

先ず作品1の方は，先の論文で詳述したように，「トッテは，ぬいぐるみのクマ君を探している内に，沢山のおもちゃを，次から次へと引張り出していって，部屋中をすっかりちらかしてしまう．しかしクマ君は，一向に見つからない．そこで思案をしたあげく，ひとまず，おもちゃを片づけることにする．すると，おもちゃがきれいに片づくと同時に，クマ君も，その中から見つかり，トッテは大喜びする」というものである．

作品2の方は，「トッテが一人遊びに飽きてしまって，つまらないような，さびしいような気持を味わっている時，たまたまマーリンという名の女の子が遊びにやって来る．2人は，元々，顔見知りなのかもしれないが，この時初めて，自覚的に，お互を友達として認識する．2人は，どこからどこまで，よく似ているが，暑い夏の日のこととて，裸になって遊んでいる内に，体の一部が異なっていることに気付く．体の形が違うのは，大人になった時，お父さんとお母さんになる為なんだ，と2人は考える．そこで2人は，お父さん，お母さんごっこを始める．2人は協力して家をつくり，家財を集めてくる．2人が理解している〔お父さんとお母さん〕というのは，協力して，自分達子どもを育てる大人のことである．そこで，ぬいぐるみやお人形を持って来て，子どもに見立て，食事をさせたり，着がえさせたり，お昼寝をさせたりしながら，その日一日，お父さんとお母さんの気分に浸って，楽しく遊ぶ」というものである．

つまり作品1と作品2というのは，状況設定にしても，題材にしても，

随分と異っている．従って，ちょうど物語の具体的内容に言及することの多いカテゴリー水準で，既に両作品の性格の違いを感じさせないような邦訳テキストというのは，実に強烈な一貫性を持つもの，と言わざるを得ない．

一方，被験者が直訳テキストに対して抱いた印象が，両作品の間で，かなり異なっていたというのは，要するに，作品の内容の違いを反映したせいだ，と思われるのである．従って，物語の具体的内容に言及することが多いカテゴリー水準では，直訳テキストは，あたかも，両作品にまたがる一貫性を持っていないかのように，見えるのである．

しかし，判断カテゴリーを統合したクラスターの水準になると，個々の作品に対する様々な印象が捨象されて，2作品分のテキストの底に潜んでいた共通項とも言える部分が，拾い出されてくるのである．つまり，それぞれの作品の具体的内容に立脚した上で，なぜ，こちらのテキストの方を好ましく思うのかという根拠が，「絵本に対する考え方」，「児童観」，「教育観」などを暗示しながら，共通特徴という姿になって，改めて立現われてくるのである．

従って，直訳テキスト『トッテ』の特徴が，こうしたクラスター水準で，始めて明らかになったということは，直訳テキスト，即ち元々のトッテ絵本の特徴というのが，正に，児童観や教育観の水準のものであった，という事実を物語ることに外ならない．

他方，カテゴリー水準で，既に明確な特徴を露わしていた邦訳テキストに関しては，クラスター水準で，何が明らかになったのだろう．勿論，こちらの方からも，別の児童観や教育観が浮かび上ってくる訳だが，この場合，トミーちゃん絵本のと言うよりは，その背後にあって，この種の邦訳を支えているような考え方や思想が引き出されて来た，と言った方が適切であろう．

それでは最後に，トッテ絵本の思想と，トミーちゃん絵本を支える思想

の違いを，少し詳しく，見て行くことにしよう．クラスター水準で明らかになった，この2種類の思想は，次の3点で好対照を成していた．

まず第1に，『トミーちゃん』の方が，文章の様式や，言葉そのものの美しさに重点を置くのに対して，『トッテ』の方は，物語の内容を伝えることに，重点を置いていた．これは勿論，『トミーちゃん』テキストの方が言葉がこなれていて，翻訳としての出来が秀れている，という事実の反映である．しかし一歩進めて言えば，日本文化独特の耽美主義と，現代西欧文化に特有なリアリズムの対立が，ここに姿を現している，と見ることもできよう．

第2に，『トミーちゃん』の方が，「子どもは子どもらしく，かわいらしいもの」という認識を示しているのとは対照的に，『トッテ』の方は，「子どもの感情や思考活動，つまり心の働き」に対して，大きな関心を払っている，という事実があった．換言すると，前者の方が，子どもの認識能力や情緒の動きに関して，ステレオタイプ的に矮小化された見解を持っているのに対して，後者の方は，すべての人間に共通するような心の働きを，子どもの内に認めて，これを尊重しようとしているように，見えるのである．

第3の対照点としては，『トミーちゃん』の方が，しつけや教育に対して，消極的な姿勢を示しているのに比べて，『トッテ』の方は，むしろ，しつけや教育を積極的に推進していこう，という姿勢を持っていることが挙げられる．日本では，絵本や童話など，幼児を取りまく文化活動の世界で，「教育的働きかけ」が，一まとめに嫌悪されてしまう風潮がある．[29] 従って，『トミーちゃん』の中に見受けられる「教育回避的な姿勢」というのも，そうした風潮と無関係とは言えないのである．

さて，以上3つの対照点を通して示された『トッテ』の特徴というのは，正に原作者ヴルデが，トッテ絵本の創作に当って意図したものであり，今日では，既にこの作品シリーズの特徴として，スウェーデン国内

で，定評のあることがらでもある.[21]

従って，被験者達の反応を通して，改めて，この特徴が浮かび上って来たということは，オリジナル・テキストに忠実な翻訳を付けさえすれば，日本の親や大人達の間でも．原作の“トッテ”が持っている特徴や思想は，確実に伝わるものだ，という事実が証明されたことになる．

一方，同じ３つの対照点を介して示された『トミーちゃん』の特徴というのは，紛れもなく，私が先の論文の中で，「日本人の親達の期待を先取りする形で，トミーちゃん絵本を規定することになった思想」として，推定したものである．つまり，「子どもにとって真実の世界を描くことを諦め，ふんだんに盛り込まれるはずの教育的機会を，ないがしろにする」[22]ことを期待し，支持する親が，実際，私達日本人の間に大勢いる，という事実も，明らかになった訳である．

所で幼児期の子どもに対するものとしては，この種の期待は，むしろ穏当であり，危険性を帯びているなどとは，とても思えないかもしれない．しかし私達大人の，こうした期待は，「活発に働く子どもの心」や，「そうした子どもの心に結びついた形での教育」から，目をそらしているだけに，児童期以降，社会からの要請さえあれば，今度は，どんな種類の教育でも，子どもに押しつけるような態度に，易々と，或いは，結局の所諾々と，変わり得るものだ，ということだけは，理解しておく必要があるだろう．

注

（1） 石崎秀和，『トッテの世界』（幼児絵本の翻訳をめぐる比較教育学的検討），哲学第69集，三田哲学会，1979，pp.91～129．

また次の拙論も上記論文に関係している．

————，『幼児絵本の翻訳に見る私達のしつけ観』（トッテ絵本についてのケース・スタディ），日本比較教育学会第15回大会・発表要旨集録，1979，pp.23～24．

————，『幼児絵本の翻訳に対する大人と子どもの反応』（トッテについての実験），日本比較教育学会第19回大会，発表要旨集録，1983，pp.33～34．

(2) “トッテ”という名前の幼い男の子が，日常生活の中で繰りひろげる物語を描いた．10冊のシリーズ絵本．作者は，Gunilla Brorsson Wolde (1939～)
このシリーズに含まれている作品を，発刊年順に表にすると，次のようになる．この内，※印の作品に関して，今回，テキストの比較実験を行った．なお，(かたづける) は，本文中の，『トッテのおかたづけ』と，同じ作品を指している．

発刊年	オリジナル版原題名 (仮訳) “トッテ”シリーズ	邦訳版作品名 (1976) 『トミーちゃん』シリーズ
1969	Totte badar (おふろに入る)	『おふろにはいる』
	Totte går ut (外に出かける)	『おしたくできたよ』
1970	Totte städar (かたづける)*	『くまくんどこ』*
	Totte bygger (家を建てる)	『おうちをつくろう』
1972	Totte går till doktorn (医者に行く)	『おいしゃさんへ』
	Totte klär ut sig (着かざる)	『ぼくたちおばあちゃん』
1973	Totte bakar (ケーキを焼く)	『けーきをつくる』
	Totte leker med kisse (ねこと遊ぶ)	『ねこちゃんあそぼうよ』
	Totte och Malin (トッテとマーリン)*	『マリーちゃんとぼく』*
	Totte är liten (トッテは小さい)	『ぼくちいさくないよ』

(3) 注(2)参照．なお翻訳者名は，高村きみ子氏であるが，実際には，スウェーデン語からの下訳作製段階，最終訳決定段階などで，編集部が強力に介入していたことを，同シリーズ担当責任者，神鳥統夫氏が認めている．

(4) こうした事情については，1982年夏に，偕成社編集部で取材．

(5) この事実については，日本出版販売株式会社，書籍仕入販売部，書籍調整課児童書係で取材．

(6) ベッティーナ・ヒューリマン，『子どもの本の世界』(野村泫 訳)，福音館書店，1969．によると，「スカンジナビアの絵本には，たいてい明るい光，明晰さ，清潔さ，それから快活さもかがやいている……」，p．388．

(7) 1980年9月，スウェーデンにグニラ・ヴルデを訪問して，直接取材した．

(8) 手話のさし絵は，スウェーデン聾唖者協会の協力の下に，Inger Edwall が描いている．

(9) “トッテ”の場合よりも，やや年長の読者層，つまり6～8才の子どもを主対象にして，1974～1977年に書かれた，10冊のシリーズ絵本．日本では，同じく偕成社から，『エミーちゃん』シリーズとして，1977年に8冊が邦訳出

版されている.

(10) スウェーデン人作家の，国内における図書貸出件数を，スウェーデン作家協会提供の，図書館統計（1978年4月現在）を基に，作製すると次のようになる．但し，1977年度上位10名についてのみ問題にする.

順位	作　家　名	作者別の年間貸出件数(単位は万件,概数) 1977年	1976年	1975年
		(万)	(万)	(万)
1	アストリッド・リンドグレーン	135	136	139
2	エルザ・ベスコウ	81	96	91
3	グニラ・ヴルデ	61	49	21
4	ベッティル・アルムクヴィスト	59	56	63
5	ダーグマル・ランゲ (マリア・ラング)	55	58	55
6	ベルンハルド・ノード	49	53	38
7	ハンス・ペータション	48	46	47
8	インゲ・サンドベルイ	42	46	51
9	ハンス・エリック・ヘルベルイ	42	31	21
10	ヨスタ・クヌートソン	40	39	46

1978年以後，ヴルデは更に貸出件数を伸ばしている．しかし，この頃から彼女は，主に，「馬と一緒の田園生活」を描いた，青少年向け小説の方に，転向している．従って，これ以後の統計値を，“トッテ”や“エンマ”との関係で論じることは難しくなってきている．なお，スウェーデンの総人口は，約800万人である.

(11) John Gillespie & Christine Gilbert, “Best Books for Children, preschool through the middle grades”, Bowker Company, 1978 の中に，米国版の “Tommy goes to the Doctor”, Houghton, 1972 が記載されている.

(12) 『世界の絵本100選』日本児童文学別冊，1977.『えほん—子どものための300冊』，草土文化，1981.『改訂・世界の絵本100選』，偕成社，1981．以上のいずれにも，『トミーちゃん』シリーズは，含まれていない.

(13) 労働省が1983年10月にまとめた「昭和58年度版　婦人労働白書」によると，0～5才の乳幼児をかかえた母親の場合でも，有業率は39.3%である.

(14) 東村山市福祉部保育課提供の1978年4月1日現在の資料によると，実験をお願いした各保育所の規模は，次の通りである.

規模＼保育所	第3保育所	第4保育所	第5保育所
敷地面積（㎡）	1,438	1,481	1,653
建物面積（㎡）	534	393	449
収容定員（人）	100	100	100
保母数（人）	15	15	15

この他に，第6保育所では，1980年春に，予備実験や予備調査を，度々お願いした．

(15) 偕成社版の邦訳テキストと，オリジナル・テキスト（直訳テキスト）との違いについては，先の拙論の中で，各作品毎に詳しく論じたので，そちらを参照していただくと，幸いである．なお，直訳テキストの作製段階では，Göte Klinberg, "Barnlitteratur-forskning", Almqvist & Wiksell, 1972 と，G. Klinberg, Mary Ørvig & Stuart Amor, "Childrens Book in Translation", Alnqrist & Wiksell, 1978 を参考にした．

(16) テキストが，絵本の白地部分に印刷されていた為，テキストを修正液で白くぬりつぶし，スライドに取直してしまうと，こうした処置の痕跡は，ほとんど目に付かなかった．

(17) 煩雑さを避ける為に，本論文の中では，直訳テキストを『トッテ』と呼んでいるが，実際の実験場面では，登場人物の名称を，邦訳テキストの場合も，直訳テキストの場合も，すべて，「トミー（ちゃん）」あるいは「マリー（ちゃん）」に統一した．これは名称の差違がもたらすであろう効果を排除する為の措置である．

(18) 統計的処理の為に参考にしたのは，肥田野直ほか，『心理教育統計学』，培風館，1961. Baird, J. C. & Noma, E., "Fundamentals of Scaling and Psychophysics", Wiley, 1978.

(19) 慶應通信（The Keio Correspondence News）の1981年10月1日発行の第403号紙上に発表された，夏期スクーリング受講生職業別分布（文学部）を基に推定した．

(20) 例えば，安藤美紀夫の『幼年期の子どもと文学』，国土社，1981は，幼児と文学に的を当てた，秀れた著書である．しかし，その安藤でさえ，中川李枝子の『いやいやえん』(1962) の難点として，「時折，顔をのぞかせてくるしつけの構えは，大人の教化意識のあらわれに他ならないからです．」(p.172)

と述べている．つまり彼にとっては，「幼児と同じ視点を持つことによって，幼児達の行動や空想を描くこと」(p.171) は，素晴らしいが，教育的姿勢が少しでも顔をのぞかせては，まずいというのである。しかし私は，「大人が子どもの視点を取る」ということは，大人と子どもとが共有している何かを介した時だけ，可能なことだと思う．その場合，大人は決して，子どもと完全に同じ地点に立っている訳ではないから，自ら，いっさいの教育的姿勢を排除することは不可能だし，また，そうしようとすることの根拠に疑問を感じるのである．

子どもの視点を尊重しつつ，教育的働きかけを躊躇しはしない，という行き方を，絵本との関わりで示したものとして，佐々木宏子の『絵本と子どものこころ』，有斐閣，1983を推薦する．国外に目を向ければ，そうした行き方は数多く見受けられる．中でも，ポール・アザールの『本・子ども・大人』，紀伊国屋書店，1957や，前述のヒューリマンの立場が代表的である．

ヒューリマンなどは，絵本の源流の1つにコメニウスの『世界図会』を置いているほどである．

(21) 児童図書に関するスウェーデンの代表的書誌を調べてみると，「……ヴルデは，幼児向絵本の分野に，全く新鮮で具体的な観点を導入した．彼女が物語るのは，正しく，幼児達が実生活の中で体験する感情や，葛藤や遊びなどである．従ってヴルデ以前の幼児向絵本というのは，かなり静止的なものであった，と言わざるを得ない．トッテは，新しい活動力をもたらしたのである．」と記されている．(Lars Furuland, Örjan Lindberger and Mary Ørvig, "Ord och Bilder för barn", Raben & Sjögren, 1979. p.327)

ヴルデ自身が語る，"トッテ" 創作の目的は，「幼児に対して，出来るだけ良い本を与えたかった．つまり子どもを楽しませると同時に，育てるような本，が私のねらいであった.」(Kerstin Brunnberg, "Woldes Totte böcker : en protest mot alla usla barnböcker", Förskolan, nr. 5, 1976)

(22) 前掲拙論『トッテの世界』の P. 128 で用いた表現.